

## 「多様な外国人1世」とともに

### 何をなすべきか

一般社団法人 Moment

代表理事 金順愛

世の中は「外国人政策の見直し」に関心が向けられている。

AI はこのように答える。

外国人政策とは、日本に在住する外国人と共生するための出入国管理、労働、教育、社会保障、生活支援、安全・治安維持など多岐にわたる政策のことです。単なる「受け入れ」だけでなく、「戦略的誘致」や多様な人々が共に生きる「包摂的な環境」の整備といった考え方が重視されています。

維新との連立で発足した高市政権が、「外国人政策を見直す」ことで、この AI の綴りは変わっていくのであろうか。

高市政権が、「安全・治安維持」を基本とした見直しを目指している事に、私たちはどのように対処すべきか。

そもそも、外国人と聞いて思い浮かべる像はどんなものか？ 見た目で日本人ではない人？ 日本語を知らない人？ 国籍が日本でない人？ 外国人としての自覚がある人？ 外国人とはいったいどんな人なんだ？ 先ずは一色担にくれないのではないだろうか。

私は日本で生まれた在日朝鮮人2世。朝鮮学校に通い、両親が1世で朝鮮語を話していた事から朝鮮語の読み書きができて話せる。生活用語は日本語。見た目は日本人？ 本名を名乗らなければ日本人で通る。多くの在日韓国・朝鮮人？ 在日コリアン？ が日本名で日本人のように暮しているのが一般的だ。

かつて外国人登録法に基づき指紋押捺をして外国人登録証を常時携帯した。

東京品川区の町工場街で生まれ育った私。アボジ（お父さん）が外国人登録日に慌てて私と二人で自転車に乗り、入管へ走ったことを今でも覚えている。また、字の書けないオモニ（お母さん）の右手の上に私の手を乗せて、オモニの更新書類を作成した事も思い出す。常時携帯義務に違反したら大村収容所

に送られると常にびくびくしながら生活していた事も。

在留資格は数回にわたり変わり、現在は「特別永住者証明書」となる。常時携帯義務は無くなり提示義務が残る。指紋押捺義務は無くなったが、私たちの指紋は法務局に全部残っている。

今、行政や郵便局で、国籍欄の記載は、「日本籍または特別永住者」と「外国籍（特別永住者を除く）」と区別されるようになった。

一般外国人は「在留カード」を所持している。2012年からこのように変わったが、私たちのような存在をしらない行政の窓口、銀行の窓口などでは、外国籍なのに「在留カード」が無いのかと言われることは度々ある。

そう。私はかつて、統一した朝鮮に帰る事を考えていたが、日本に永住せざるを得ない外国人。

日本による植民地支配により、戦時中に日本へ渡ってきた朝鮮人は「朝鮮寄留簿」にまとめられた。日本は敗戦後、植民地支配の清算を行っていない。朝鮮半島出身者は「朝鮮籍」にまとめられ、1952年「外国人登録法」により外国人として区別され、私たちは社会保障の対象から外される。

そう。外国人＝朝鮮人の時代。

朝鮮人は、祖国への往来、外国人登録証明書の常時携帯義務や指紋押捺義務の廃止、年金差別の反対などを団結して運動をして権利をひとつひとつ勝ち取っていく。

当時の外国人たち—朝鮮人たちは、声をあげた。朝鮮への侵略、植民地支配の清算＝抜本的な解決を基本に社会保障制度の差別政策是正を訴えて行った。

今その者たちはこの世を去り、代をついでいる。その2世、3世たちは、今、日本が掲げる「外国人政策」を「自分事」として受け取っているだろうか。

自分たちは日本人ではないけど一般の外国人でもない。

自分は帰化したからルーツは朝鮮でも日本人。

多文化共生社会を目指した活動を担う若者たちは、今の外国人の権利は、在日朝鮮人の権利闘争があったからだ、それがあって多文化共生があると話した。

2012年「外国人登録法」は廃止された。

人口減少、あらゆる産業における人手不足。日本は外国から多くの人材を受け入れる事になる。有期の

在留資格を持ち、いつか自身の祖国へ帰る予定の外国人が私たちの生活を支えている。  
そして時代は、その外国人2世が日本で生まれ育っている。

私が住む団地も様々な国の人たちが住むようになった。向かいの家にはウズベキスタンから来た若い夫婦が引っ越して来た。事務所のとなりにも。最近、ドアノブにかわいいハンカチとローマ字で書かれた手紙がぶら下がっていた。Rinnjinni narete uresii と。アメリカからやってきた27歳男子。こちらこそうれしい！

AIがつづっている通り、彼らのナラティブに関心を持ち、隣人として心配しあいながら暮らす事、そのために必要な政策が整備されればいい事。

監視し、管理する目的は何か？

私は、朝鮮総連愛知県本部の役員として、かつて愛知県朝鮮人強制連行真相調査団の活動を担っていた。

1990年9月の3党共同宣言時、朝鮮民主主義人民共和国との国交正常化に大きな希望を抱き、2000年6月の南北首脳会談時、朝鮮半島の統一に希望を抱いた。

しかし2002年9月の日朝首脳会談時の朝鮮による拉致犯罪が明確になった事で、国家権力の無慈悲さ、見事なまでの国家の民に対する裏切りを体験した。

当時、私は国家を背負っていたと思う。それは、国無き民は喪家の犬の如しという教えを1世から受け継いでいた。民族教育を通して、国があって自身があると学んできた。

国のためなら、未来のためなら、今を我慢するとの価値観に疑問を抱き始めた。  
国家も民がいて成立するものなのに。

そんな思いを抱きながら、2003年より在日同胞のための NPO 法人コリアンネットあいちの活動を開始した。そして多文化共生社会の実現のために奔走する若者たちと出会った。社会福祉士の資格取得のための勉強も開始した。その過程で、自分自身が、同胞コミュニティがどれだけ日本の地域社会と断絶しているか、それは内なる偏見、差別意識を助長しているのではないかと考えた。

朝鮮高校無償化裁判の過程で、総括の度に弁護団の中谷雄二弁護士は訴えた。社会を変える事が

大事！ 社会に目を向けないと！

私は2021年から同胞コミュニティを離れ、ケアマネジャーとして地域社会に出た。見えてきた事—多くの人々が社会の一員である意識が希薄である事。「誰かがやってくれる。なんのために生まれて来たんだろう」との受け身である事。それは在日も日本人も同じだと感じた。

楽しく生きぬきたい、生きている間に何かをしたいという人とめぐり合ったときの学びがあった。自立・自律・「エンパワーメント」。こうして自分でライフプランを起てて行→立てていけたら社会は変わっていくのではないだろうか。

私は、社会福祉的な活動、社会運動が断絶していることも課題だと感じている。

日本語を話せなかった「朝鮮人1世」の時代から半世紀を超えて「多様な外国人1世」たちの時代を迎えている。

「多様な外国人1世」は、日本という国が一体どこに行こうとしているのか、ここに生きる民として知らなくては。それが差別と偏見の発信であるならば、声をあげるべきと思う。

私たちのように植民地支配により日本に住む事になった者もいれば、多様な理由で日本で住む人たちがいる。日本だけではない。様々な人たちが様々なところで自身の生を紡いでいる。今いる地域、それぞれがその地域を拠点にともに考えていく事、それを意識できる事、それが今大切なことではないか。

社会福祉的な視点としては、支援する側とされる側が「固定」されている制度の中で、平等であるはずの人と人との関係性が見えなくなっているのではないだろうか、支援する側が疲弊しているのではないか、差別是正の鍵がここにあるのではないかと考える。

いずれは呼ばれるのであろうコリアンジャパニーズ、特別永住者証明書を持つ者たちは、一般外国人とは違うのだからと「外国人政策の見直し」に知らんぷりをできない。民のための国家ではなく、他国に強い国家、戦争に負けまいと支度する国家は、民を平気で「戦力」「戦争物資」と考え、「外国人」を一色単に考えるであろう。